

たたかう少女・バレンタインスペシャル チョコレート娘2

二月上旬の札幌といえは、冬のまつただ中。

気温は日中でもプラスになることは少ない。

凍てついた、雪と氷の世界。

しかし、ここ、私立白岩学園中等部の格技場は、そんな外の冷気とは無縁の空間だった。

放課後の格技場といえば、柔道部や空手部が稽古をしている、どちらかといえば地味な場所であるのが普通だが、それはこの学校には当てはまらない。

何故なら、部員の数倍のギャラリィ、それも女子生徒ばかりが、格技場の周囲を取り巻いているからだ。

それでも、柔道部と空手部の部員たちはほとんど意に介する様子もない。

これが日常差万事だから。

別に、この学校では武道系クラブが大人気、というわけではない。

彼女たちのお目当てはただ一人。

いま、格技場の中心で形かたの演武をしている女子空手部の三年生。

そう、静内しずない彩樹さいきである。

彩樹こそ、白岩中でもっとも女子にモテる人物だった。

白岩学園は女子校ではなく、やや女子の比率が高いものの一応共学校だ。

にもかかわらず、である。

しかしそれも無理はない。

この年頃の女子としてはかなり高い、すらりとした長身。

精悍な、整った顔立ち。

前髪を目にかかるくらいに伸ばしている以外は、短く刈った髪。

身体に無駄な脂肪がほとんどないために、外見はどう見ても“美少年”だ。

男っぽいというよりは、どちらかというと中性的な雰囲気がある。

見た目は痩せているくせに、弱々しい雰囲気は全くない。

なにしろ、実戦空手・北原極きよくとう闘流の全国大会で優勝した、中学女子チャンピオンである。

そしてなにより…

本人が大の女好きだ。

自ら、同性にしか興味が無い、と言い切っているのである。

どくどくテクニクを駆使しているのかはわからないが、とにかく女の子を口説くのがうまい。

かくして彩樹の周囲には、ハート型の目をした女の子たちの人垣ができることになるのである。

三学期になると、卒業間近の三年生が部活に出てくることはほとんどないが、今日は久しぶりに彩樹が後輩の指導に来るといので、彩樹のファンたちが集まったのだ。

演武中は、彩樹がもつとも魅力的に見えるときのひとつである。

ファンの女の子たちは、そのことをよく知っている。

彩樹は床の上を滑るように移動し、次々と突きや蹴りを繰り返す。

彼女の動きは、常人の目では追えないほどに疾はやい。

観客たちは、飛び散る汗の滴のきらめきによってのみ、その動きを知ることができる。

大勢の観客がいるにも関わらず、格技場の中はしんと静まり返っていた。

彩樹の拳が、空気を切り裂く音だけが響く。疾く、鋭く、力強く。

そして微塵の無駄もない、極限まで洗練された動き。

誰もひとことも発することなく、彩樹の動きに見とれていた。

そう、彩樹は確かに美しかった。虎や豹のような危険な肉食獣の姿が美しいのと同じように。

人を斬るために造られたはずの刀剣が、ときとして見る者に感動を与えるのと同じように。

そんな、危険な美しさがあった。彩樹が演武を終えると、取り巻きの女の子たちが一斉に駆け寄る。

汗を拭いてもらおうと、めいめいがタオルを差

し出した。

こんなときの彩樹はとても公平で、誰かをひいきするようなことはない。

いちばん取りやすい位置にあるタオルに手を伸ばす。

ひとこと、「ありがとう」とだけ言って。

そして汗を拭いたタオルを返すとき、その女の子を抱き寄せて額か頬に軽くキスをする。

それが目当ての少女たちで、彩樹がいるときの格技場はいつも大変な騒ぎだった。

そんな女の子たちの群から少し離れたところで、

「…やっぱり、彩樹さんて素敵ですわ」

長い黒髪をポニーテールにした小柄な少女が、ため息まじりにつぶやいていた。

* * *

「はあ…」

コーヒーカップをテーブルに戻しながら、一姫いっしきは今日何度目かのため息をついた。

「やっぱり、彩樹さんて素敵ですわね…」

うつとりとした瞳でつぶやく。

「…いつちゃん、マジで彩ちゃんに惚れた？」

やや呆れた様子の早苗が訊く。

「そ、そ〜ゆ〜わけではありませんわ。わたくしは、ただ…」

「ど〜見たって、恋する乙女の表情だよ」

からかうように言ってから、自分のカップに手を伸ばした。

「そ、そうでしょうか？」

一姫が戸惑った表情で聞き返す。

「コーヒーひとくち分の間を置いてから、早苗は

応えた。

「たとえば、彩ちゃんのことを考えると、胸がど

きどきする？」

「…はい」

「彩ちゃんの前に立つと顔が赤くなったり、彩

ちゃんが他の女の子と話したら胸がきゅ〜っと

締め付けられるような気がしたり？」

「…はい、…はい」

質問のひとつひとつに、一姫はうなずいて答え

質問のひとつひとつに、一姫はうなずいて答え

質問のひとつひとつに、一姫はうなずいて答え

る。

早苗が、悪戯な笑みを浮かべて言った。

「彩ちゃんのことを考えながら一人エッチしたり？」

反射的にうなずきかけた一姫は、あわてて手で口を押さえた。

たちまち、顔が真っ赤になる。

「さ、さ、早苗さんっ！いきなりなにを訊くんですかっ？」

「そっか。なにも知らないような顔して、やることはちゃんとやってんだね。」

声を上げてやらせると笑う。

「そ、そ、そんなことしませんわっ！」

「隠さなくてもいいって。別にいいじゃない、オナニーくらい誰だってやってるんだし。ねえ？」

早苗は、背後を振り返って同意を求める。

ぶう　　つつっ！

そこには、突然のとんでもない質問に、思わず飲みかけのコーヒーを吹き出している、若いサラリーマン風の男の姿があった。

「…いくら今どきの女子中学生とはいえ、少しは

恥じらいというものがないのかい？」

ハンカチで口元を拭いながら、男は苦虫を噛みつぶしたような表情で言った。

「あれ、知内さん。いたの？」

「いたの、つて…ここは僕のオフィスだぞ？」
むっとした表情でハンカチをしまう。

そう、早苗と一姫がいるのは、札幌市内にある人材派遣&紹介業、株式会社MPSのオフィスだった。

そしてこの不機嫌そうな男は、この会社の営業部長、知内祐人（しうちゆうひと二十七歳、独身）である。

「だいたいどうして君たちは、いつもここを喫茶店がわりにするんだ？」

「いいじゃない、ぴっちぴちの女子中学生が遊びに来てあげてるんだから、コーヒーくらい飲ませてくださいって。」

まったく悪びれない様子で早苗が応える。

知内は不機嫌な表情のままだ。

自称「ぴっちぴちの女子中学生」が遊びに来たところで、嬉しくもなんともない。

彼はロリコンではないし、それどころか、昨年

の夏頃から少々女性不信になりつつある。

「そもそも、今日はなににきたんだい？」

「買い物について。バレンタインのチョコを買い
うと思つて。知内さんにも一個あげようか？ ギ
リだけど」

「そうか、それで今日は二人だけで、静内くんが
いないのか」

「彩ちゃんは、もらうの専門だからね」

「しかし、わざわざ買い物途中に途中下車まで
して？」

言外に「用もないのに来るな」と言っているの
だが、この少女たちには通じていない。

「玲子さんのコーヒーはとても美味しいですか
ら」

一姫の言葉に、少し離れた席に座っていた知内
の秘書、雨竜玲子うりゅうれいこが小さく微笑んだ。

「そうか、いっちゃんつてば、本気で彩ちゃん
に惚れちゃったか」

玲子が出してくれたケーキを頬ばりながら、早
苗は話題を戻した。

一姫が恥ずかしそうにうつむく。

「あ…あの…、わたくしつて…いわゆるレズビア
ンということになるのでしょうか？」

という一姫の言葉に、他の三人は思わず顔を見
合わせる。

その表情を見れば、三人が同じことを考えてい
るのは一目瞭然だった。

「他の相手ならともかく…」

「静内くんを好きになつたからといって、レズと
いえるかどうか…」

「どつちかというと、惚れられた彩ちゃんの方に
問題があるよね」

三人そろつてうんうんとうなずく。
「彩ちゃんの女らしい部分なんて、戸籍ぐらいだ
もんね」

「それは言いすぎだろう。少なくとも、解剖学的
には女性じゃないのかい？」

「部長、それもちよつと言いすぎでは…」

「知らない、見たことないもの。服の上から見る
限り胸は小さいし、中身も脂肪じゃなくて大胸筋
かもしれないよ？」

「あなたたち仲いいんだし、一緒にお風呂とか入ったことはないの？」

「じょ〜っだんじゃない！」

玲子の問いに対し、早苗は周囲がびっくりする

ほどの大声を上げた。

意外なくらい真剣な表情だ。

「そんな危険なこと、できるわけないじゃない！」

「危険？ お風呂が？」

知内と玲子は、早苗の言葉の意味が分からず、きよとんと顔を見合わせる。

「うちらが彩ちゃんの前で裸になったりしたら、

五秒で犯されちゃうよっ！」

「……そうなの？」

玲子が確認する。

一姫は恥ずかしそうに、控えめにうなずいた。

大人ふたりは再び顔を見合わせる。

心底呆れた表情で。

* * *

大通り駅で地下鉄を降りた早苗と一姫は、地下街を歩いて近くの三越デパートに入った。

もうじきバレンタインデーということで、拡張

されたチョコレート売場は女性客で賑わっている。

人混みの間を通り抜けながら、早苗は次々と

チョコを買い込み、たちまち両手はチョコレート

でいっぱいになった紙袋でふさがる。

「早苗さん、そんなにたくさん買うんですの？」

驚きと、ほんの少し軽蔑の混じった表情で一姫

が言う。

「モテる女はつらいよね、あはは〜」

その口調はこれっぽちも辛そうではない。

実際のところ、早苗はかなり男子に人気がある。

それだけの条件を満たしている。

顔が可愛くて。

人なつっこい、明るい性格で。

しかも胸が大きい！（ここが重要）

今のところ決まった彼氏はいないが、それだけ

にこの時期は言い寄ってくる男も多い。

「…その…早苗さんで、誰か好きな方が？」

そう訊ねる一姫に対し、

「ウチ？ うっん…いい男はみんな好きだよ？」
などと、どこかの喫茶店のウェイトレスみたいなことを言う。

「それより、いつちゃんこそせっかく来たのに一個も買っていないじゃない？」

すでに十個のチョコを買った早苗に対し、一姫はいまだに手ぶらだった。

「はあ…」

と、困った表情で答える。

「実はわたくし、これまでバレンタインチョコとこのを買ったことがありませんので、こうたくさんあるといたいだれを買えばいいものやら…」

きよるきよると周囲を見回す。

「…目移りしてしまいますの」

「初めて？ いまどき天然記念物なみだね」

からかうように言われて、一姫にしては珍しく、少しだけ頬を膨らませた。

「それに、彩樹さんてきつとたくさんチョココレートをもらうでしょう？ ありきたりのチョコを差し上げて、目にとまらないでしょうし…」

「本命チョコなら、手作りもいいんじゃないの？」

「それが…あの…」

一姫の声が、急に小さくなる。

言いにくそうに、

「わたくし…、お料理はちょっと…その…」

「いつちゃん、料理きらい？」

「いえ、お料理を作るのは好きなのですが、その…、わたくし、火加減と匙さじ加減に少々難があるようでした…」

「つまり、ヘタなのね？」

なるほど、と早苗はうなずく。

たしかに、一姫はあまり器用そうには見えない。なにごとにもワントンポずれているというか…。

その性格が、料理にも反映されてしまうのだらう。

「早苗さんは、彩樹さんにチョココレート差し上げますの？」

料理の腕に関してはあまり触れられたくないのか、一姫の方から話題を変える。
「ん、そうだね」

唇に指を当てて早苗は考え込む。

「あげないとあとで苛められるだろうしな。ホント、わがままなんだから」

「彩樹さんはそこがいいんじゃないやありませんか」

一姫がくすくすと笑う。

あばたもナントカ、だった。

早苗は小さく肩をすくめる。

彼女だつて彩樹のことは嫌いではない…というか、はつきり言つて好きだ。

ただしそれはあくまで友人として、である。

ノーマルな早苗にとつて、彩樹がどれほどカツ

コ良かろうとも、なにより女であるという点で恋愛の対象外となる。

(あれで、男の子だつたらね)

けっこう好みだったのに、と声に出さずにつぶやいた。

「あ、これでいいや、彩ちゃんにあげるチヨコ」

早苗が手に取ったチヨコを見て、一姫は目を丸くした。

「あの…、それってもしかして…」

なにかの冗談ではないかと、訝しみながら訊ね

る。

「それ、『森 チヨコール(大粒)』ではありませんの?」

「そう、『永チ コボール(大粒)』だよ?」

金なら一枚、銀なら五枚、でおなじみのアレだ。

「あの…、さすがにそれはマズイのではないでしょう?」

バレンタインチヨコを買ったことがない一姫でも、これはちよつと違ふと思う。

『大粒』は普通のチヨコボールに比べて三倍以上の価格だが、それでもスーパーでは百八十円くらいのものだ。

いや、価格以前の問題である。

「それって、チヨコをあげないよりもよけい彩樹さんを怒らせそうな気がするのですが…。彩樹さんであれで意外とグルメですし…」

本気で心配そうに言った。

彩樹は乱暴者である。

しかも、わがままである。

彼女の場合、それすらも魅力の一部であるのだが、彩樹と接する者は、その怒りに触れないよう

に細心の注意を払うのが常だった。

彩樹に対してなんの遠慮もなしに言いたいことを言えるのは、かのマウンマン王国のアリアーナ姫くらいのものだろうか。

しかしそのためにアリアーナは、いまや『世界一、生傷の多い王女様』である。

「心配ないって。彩ちゃん、絶対に喜んでくれるから」

「そうでしょうか…?」

自信满满で、(ただでさえ大きい)胸を張って言う早苗を、一姫は疑わしげに見る。

あの彩樹が、チョコボールで満足するとは思えない。

たとえそれが金のエンゼル付きだったとしても、明日は忘れずに魔術師の杖を学校へ持っていこう、と考えた。

まず間違いなく彩樹に殴られるであろう早苗の治療のために。

* * *

今年のバレンタインデーは日曜日なので、彩樹のもとに押し寄せるチョコ津波のピークは、十二日の金曜日だった。

「静内先輩…これ、受け取ってください!」

朝から、いったい何人の女の子がこう言ってきたことだろう。

長蛇の列、というのは少し大げさだろうが、休み時間の彩樹の周囲には、本命、義理入り混じって、チョコレートやプレゼントを胸に抱いた女の子たちの姿が途切れることはなかった。

そつと机の中や靴箱に入れておく、といった常套手段をとる者は意外と少ない。

直接手渡した場合には特典があるからだ。

「彩樹お姉さま、これ…」

後輩の女の子が、綺麗なりぼんをかけた包みを恥ずかしそうに差し出す。

「ありがとう、嬉しいよ」

彩樹はその少女を強引に抱き寄せて、耳元でささやいた。

唇が、少女の耳をくすぐる。

その耳が、赤く染まる。

恥ずかしさと嬉しさ、くすぐったさと気持ちよさの入り混じった不思議な感覚に、少女は身体を震わせた。

潤んだ、熱っぽい瞳で彩樹を見つめる。

ぼくとした、心ここにあらずといった表情で。

周りで「順番待ち」をしている女の子たちが、きやあきやあと騒いでいる。

今日は、朝からずつとこんな調子だった。

やってくる女の子の一人一人に、これをしてやるのだ。

気分次第で、耳だけではなく、うなじや頬、あるいは胸元へのキスだったりもする。

ちなみに、義理チヨコのもりでいる同学年の友人たちにも同じことをする。

相手が嫌がってもお構いなし。

まあ、校内一のテクニシャンといわれる彩樹を相手に、最後まで抵抗し続けられる者もいないのだが。

早苗と一姫がやってきたのは、放課後、それも

下校時間近くになってからだだった。

さすがにこの時刻になると、彩樹を取り巻く女の子たちもそろそろ打ち止めだ。

「彩ちゃん、チヨコレート持ってきてあげたよ」

「遅いぞお前ら、さつさと来いよな」

「もう立場で、ずいぶん偉そうじゃん？」

他の女の子たちに比べれば、早苗も彩樹に対してかなり強気に接することのできる一人ではある。

ただし、彩樹と知り合ってからには保健室へ行く回数が増えた。

どうしてこんな、わがままで乱暴な相手と付き合っているのかと、たまに考えないでもなかったが、それでもやっぱり彩樹は魅力的だった。

「で、肝心のチヨコは？」

「そうそう、彩ちゃん用にとつくべつなチヨコを用意したんだ。これ！」

一姫は思わず悲鳴を上げそうになった。

早苗が、ラッピングもしていない『永チヨコ

ボル（大粒）』をポケットから取り出したからだ。もっとも、綺麗にラッピングしてあったらあつ

たで、それを開けた後が怖い。

彩樹の眉間にしわが寄る。

(これは…マズイですわ)

青ざめる一姫。

表情を見たところ、彩樹の怒り指数は七五パーセントというところだろうか。

七〇パーセントを超えると相手は病院送りになるというのが通説である。

(早苗さんたら…心配ないなんておっしゃって、やっぱり怒ったじゃありませんか)

「…なんかの冗談か、それ？」

危険な笑みを浮かべた彩樹が訊く。

指の関節をパキパキと鳴らしながら。

「まさか、冗談でんなことしないって。ウチ、まだ死にたくないもの」

早苗は平然と応えた。

「これは食べ方に工夫があるの。喜んでもらえると思うんだけどな」

そう言つて、チヨコの箱を開ける。

「ねえ、いつちゃん。あ〜ん！」

「え？」

不意に名前を呼ばれて一瞬開いた一姫の口に、

早苗は数粒のチヨコボールを放り込んだ。

「…っ？」

なにが起きたのかわかっていない一姫に対し、

彩樹はすぐに早苗の意図を理解したようだ。

「なるほど、な」

にやつと笑うと、乱暴に一姫を抱き寄せていきなり唇を重ねる。

「…っ！…っ？」

驚いた一姫が目を見開く。

あわてて逃れようとしたが、力強い彩樹の腕に抱きしめられて、身動きがとれない。

(…な、な、なんですのっ？ 彩樹さん？ 早苗さんっ？)

一姫はまだわかっていない。

「…んっ！」

彩樹が、舌を入れてきた。

一姫の舌の上で、チヨコボールをころころと転がす。

チヨコレートが溶けて、口いっぱい甘い味が広がる。

(さ、さ、彩樹さんてば…)

そのチヨコを舐めとろうとするかのように、彩樹の舌が口の中をくすぐる。

一姫には初めての体験だった。

以前にも、彩樹にキスされたことはある。

しかしそれは、唇が軽く触れるだけの「おやすみのキス」だった。

こんな激しい、呼吸もできないほどのキスなんて。

しかも、力いっぱい抱きしめられて。

長く垂らした彩樹の前髪が顔にかかって、男物のトニックシャンプーの香りがする。

一姫はもう、心臓が破裂しそうな思いだった。

彩樹の舌が、器用に動き回っている。

一姫の舌とからみあったり、上顎の敏感な部分をくすぐったり。

「ん……うん……」

彩樹の舌の動きに合わせて、チヨコボールの核であるピーナッツが口の中を転がる。

ころころと動いて、一姫の舌を刺激する。

それがなんだか、とてもいやらしいことのように

に思われた。

(…いや…あ…こんな…あ)

一姫は知らなかった。

キスが、こんなに気持ちのいいことだなんて。

もう、なにも考えられない。

頭がぼうつとして。

ただ、ただ、気持ちよくて。

いつの間にか、彩樹の身体に腕を回していた。

(うわあ…、彩ちゃんってば、それはやりすぎ…)

自分でけしかけておいてなんだが、早苗もここまでエスカレートするとは思っていなかった。

眼前で、恥ずかしくて直視できないほどに濃厚なキスシーンが繰り広げられている。

一姫は顔を真っ赤にして、もう意識ももうろうとしていた様子だ。

他の人がいなくて良かった。

彩樹なら人目も気にせず同じことをするだろうが、それでは一姫がかわいそうだ。

(だからあ！ そこまではやりすぎだって！)

気がつくくと、彩樹の手が一姫の身体をなで回していた。

背中やうなじ、小ぶりな胸、そしてお尻…。

その手がスカートの中にまで潜り込むのを見て、早苗は心の中でつぶやいた。

しかし、それを口に出して言ったり、あるいは彩樹を止めようなどとは思わない。

こないところまで邪魔をして、彩樹の怒りに触れる勇氣はなかった。

「ん…う…ん…」

かすかなうめき声を上げて、一姫が身体をよじらせる。

一姫には悪いが、彼女の貞操よりも自分の身が可愛かった。

それに…

本音を言うと、もう少し見ていたかった。

年頃の女の子としては、やっぱりちよつと興味があるのだ。

いったいどのくらいそうしていたのだろう。

やがて彩樹は一姫を放した。

ふたりの唇の間に、透明な滴が糸を引く。

彩樹の腕から解放された一姫は、そのまま、その場にぺたりと座り込んでしまった。

全身の力が抜けてしまったかのように。

とろんとした表情。

焦点の合わない、潤んだ瞳。

紅潮した頬。

小さく開かれた唇から、切なげな吐息が漏れた。

（さすが彩ちゃん、うわさ通りのテクニシャン！）

思わず感心してしまう。

彩樹は満足げな笑みを浮かべて、足元の一姫を見おろしていた。

「…どお、彩ちゃん。特製チョコの時は？」

「最高だな。気が利くじゃん、早苗」

彩樹は口の中に残ったピーナッツをぽりぽりと噛み砕きながら、早苗を見てにやつと笑った。

机の上に置いてあったチョコボールの箱を手にとる。

箱を耳の横で振ってみて、

「…まだ、残ってる」

彩樹の唇の間から、かすかに白い歯が覗く。

「…え？」

その台詞の意味に気付くのが一瞬遅れた。

あわてて逃げようとしたときには既に遅く、早苗は腕を掴まれてしまう。

「ほら、早苗。あゝん」

「あ、彩ちゃん…あのね…」

早苗の震える唇に、森 チョ ボールの箱が強引に押し当てられる。

ころころと、数粒のチョコボールが口の中に転がり込んだ。

おわり

あとがき

一 昨年のは二月は『午後3時のTea Party』でバレンタインネタをやりました。

去年は『みそさざい』と『西十八丁目の魔女』、そして『光の王国』のインタールード2です。

今年は特にバレンタイン向け作品を書く予定はなかったのですが、最近、一部の熱狂的な彩樹ファンの方から『たたかう少女』続編の要望が出ているので、急ぎよ『たたかう少女』のバレンタインスペシャルを書くことになりました。

(西野さん、jadeさん、見てますか?)

それにしても…去年の『チョコレート娘』もそうでしたけど、やっぱりちよっとエッチですね(笑)。

この作品を書くにあたって私がまずやったことは、近所のスーパーへ行ってチョコレートを買い込むこと。

作中で使うチョコレートは何かいいか、自分の舌で調べるためです。

それは話の都合上、次の条件を満たしたものでなければなりません。

・読者の誰もが知っているくらい、知名度の高いもの。(でなければ作品を読んでもイメージがつかめません)

・バレンタインチョコとしてもらった場合、冗談か嫌がらせと思うようなもの。

・口の中で転がして気持ちのいいもの(笑)。
候補はいろいろありました。

チロルチョコ、マーブルチョコ、アーモンドグ
リコ、麦チョコ、明治のアーモンドチョコ…。

しかし三番目の条件を満たすのが難しい。

グミやゼリーと違い、チョコレートは口移しでもあまり気持ちよくないので、やはりナッツに頼る必要があります。

アーモンドものはけっこういい線いっているのですが、先端が尖っているため、たまに舌に刺さるのが難。

普通の森永チョコボールでは、チョコが溶けるまでの時間が短すぎるし、ピーナッツも小さいのでいまいち刺激不足。

最後に残ったのが森永チョコボール（大粒）というワケ。

ところで、サンプルとして買ったチョコボールは、どれもエンゼルがついていなかったのがちよつと残念です。

まだ、金のエンゼルって見たことないんですよ、私。

さて、次回作の予定は…

いよいよ『光の王国6・銀砂の戦姫』の登場です。

…って、ずいぶん先の話ですけど。

まだ一行も書き始めていないし、『光』の本編は一作あたり約二ヶ月かかるし…、公開は春頃…かな？

どうぞ気長にお待ちください。

一九九九年二月 北原 樹恒

北原 きたはら 樹恒 きつね
kitsune@mb.infoweb.ne.jp

創作館ふれ・ちせ

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamuychep/chiron/>

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。